



健苗づくりに向けて

育苗期間は気象変動が激しく、低温なることもあり、温度管理と水管理が大切となります。屋間の高温に注意するとともに、夜温の低温にも気を付けましょう。基本技術を守り、ガッチリと根張りの良い苗で米作りをスタートしましょう。

浸種・催芽

- ①浸種は、屋内または日陰で行う。ハウス内での浸種は水温が高くなる傾向があるので避けてください。また、直射日光による急激な温度上昇を避け、外部からの異物混入を防ぐため、容器には必ず「蓋(ふた)」をします。
- ②水温は、10℃～15℃未満が確保できるよう管理します。低水温(5℃以下)は発芽率低下を招き、高水温(15℃以上)は「ばか苗病」リスクを高めますので注意する。
- ③浸種期間は積算水温100℃までとし、必要以上に長くしない。浸種水量は種子が露出しないよう十分確保する。
- ④催芽温度は30℃～32℃とし、温度が低すぎても高すぎても「ばか苗病」の発生を助長する為、温度計を設置し確認する。(催芽機を使用する場合も過信せず温度計で必ず確認する)

土壌消毒

●タチガレエースM粉剤・タチガレエースM液剤

- ①薬剤の効果により、苗質強化に加えてムレ苗発生を長期間予防します。
- ②根の生育を促進し、健苗確保に有効です。
- ③使用方法
タチガレエースM粉剤
6～8g/箱
タチガレエースM液剤500
～1,000倍/0.5ℓ灌水



タチガレエースM粉剤 1kg入 1,342円(税込) タチガレエースM液剤 100ml入 913円(税込)

育苗管理

- ①育苗施設及び周辺では、生ワラ、籾殻を使用しない。(伝染源を周辺から無くす)
- ②育苗期間中の温度は、出芽時(30℃～32℃)、緑化期(昼:20～25℃、夜:10℃以上)、硬化期(昼:15℃～20℃、夜:5℃以上)を目安とする。温度が高いと「ばか苗病、もみ枯細菌病、苗いもち病」の発生が多くなるので、温度管理を徹底する。
- ③温度計は、ハウスの高さに合わせて設置し苗箱付近の温度を測定しましょう。

育苗中のかん水

- ①緑化以降は、根の呼吸も活発になります。この時期にかん水が多いと、床土が過湿となり根の呼吸が妨げられ、マット形成が不良になります。育苗初期は、午前中に1回充分にかん水します。
- ②苗が大きくなった後期には、1日1～2回を目安にかん水を行います。夕刻のかん水は、温度低下や徒長苗となるため避けましょう。風等で育苗箱の隅が白く乾いてしまう場所は、その部分だけかん水することがポイントです。



排水溝の点検と生育の状況を確認しましょう!

①気象および麦の生育状況

1月から2月に積雪がありましたが、現在の生育は平年並となっています。融雪後の排水ができていないか溝の点検や補修をし、湿害を防ぎましょう。また、播種時期により生育の差があるため、ほ場の生育に応じた管理が必要です。

②収量確保に向けた管理

①排水対策

排水不良による湿害は、収量・品質の低下を招きます。明渠に滞水している場合は溝さらえ等を行い、速やかに排水しましょう。



排水溝がふさがっており、溝さらえが必要

②施肥(大麦・小麦共通)

●分施肥系の場合

2月下旬～3月上旬に窒素成分で3～4kg/10a程度実施しましょう。

●全量基肥施用の場合

茎数が十分確保できている(茎数400本/m²以上)ほ場では、追肥の必要はありません。ただし、分けつ不足(茎数400本/m²未満)の場合は、2月中旬～下旬に窒素成分で1.5～2kg/10a程度追肥してください。



茎数 400本/m²以上の大麦ほ場(例)

追肥不要



茎数400本/m²未満の目安

大麦

小麦

2月中旬～下旬に1.5～2kgN/10a追肥